

角持つ少年人理を救え

天城時雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然過去に転生した主人公 ■■■。

とくにやることもなく、いつの時代かもわからないのでとりあえずのんびりくらしていた。

あまりにもやる事が無くなった彼は、かつてやっていたゲーム、ワンダと巨像の二次小説を書く。

そのままとくに何もなく死んだ主人公だったが、彼の小説は後世に伝わった。

この時代にはない熱い展開。これは現代でも有名な小説となり、彼は英霊の座に至る。

そんな彼が人類最後のマスターと人理消却を防ぐ物語。

目次

序章

英霊召喚	1
英霊召喚（裏）	4
自己紹介	7
赤き外套の男	10
決着	13
黒き騎士王	16
爆ぜろ！	19
誰だお前	22
聖杯	25
幕間の物語 First	
目覚め	29
覚悟	32
召喚再び（前）	36

序章 英霊召喚

私の名前は藤丸立花。どこにでもいるような女子高生。

それがなぜか現在、火の海の真つ只中で怪しげな魔方陣の前に立っているのさっ！

どうしてこうなった……

——時は少々遡る

よくわからんアルバイトに応募してみたらあれよあれよという間にカルデアとやらに連れて来られた。自分でもちよつと何を言っているのか分からない。どうやらレイシフトの適性があるんだとか。

カルデアに着いた直後よくわからないシユミレーションとやらを受けた。いきなり草原に立っていて、目の前には武器を持った三人組と人型の岩の塊。そこから先は覚えてない。気付けば女の子と謎の小動物に起こされた。女の子はマシユ、小動物はフォウと呼ばれているらしい。

その後はレフさんってここの職員さんに連れられてブリーフィングとやらに放り込まれた。

さっきの眠気がまだ取れていないのだろうか。ものすごく眠かったので所長のお話の最中に眠ってしまった。追い出された。

トボトボと自分に割り当てられた部屋に行くと、なんとそこには我が物顔で私の部屋(暫定)を占領している中年男性がいるではないか。彼はロマニ・アーキマン。通称Dr. ロマン。このカルデアの医療スタツフらしい。どうやらこの部屋で堂々たるサボりを決行していたらしい。

そんな彼と話しているとアナウンスが聞こえてきた。どうやらレイシフトというやつが始まるので、ロマンは麻酔をかけに来い、というこららしい。

ロマンがコフィンのある管制室に向かおうとした直後、尋常じやないくらいの爆発音が聞こえてきた。どうやら管制室のほうからみたい。

確かあそこにはマシユがいたはず。よくわからないことだらけだけど彼女が心配だ。ロマンは引き返すよう言っていたがそうはいかない。私は謎の生命体フォウ君の案内のもと管制室に向かった。

管制室は酷い有様だった。至るところに瓦礫の山が出来上がり、視界全てが赤く染められたかのように炎が揺らめいている。そんな中一人の少女が目に入った。マシユだ。

彼女の足は瓦礫に埋まって抜け出せそうにない。何とか助けようとするが女手一つじゃ瓦礫は到底持ち上がらない。マシユが逃げるよう叫ぶ。無理だ。出来ない。自分だけ逃げるわけにはいかない。

そうしている間にとうとう扉がしまってしまった。もうどうしようもない。最後にマシユが声を振り絞る。その声にしたがって私はマシユの手を握る。

そうして私は意識を失った。

私は死んだのだろうか？目を覚ました場所はそうとしか思えないほどの地獄絵図だった。さっきの管制室にも勝る炎に囲まれた街。空は黒く、街はゴジラでも暴れた後と言われても信じられるほどの崩壊っぷりだ。

足音が聞こえる。瓦礫を踏み壊し近寄ってくる足音。振り向くとそこには動く骸骨がいた。黒く鋭い骨を集めて人の形を作ったような歪な骸骨。骸骨は手に持った無骨な剣を振り上げる。思わず目を閉じるが、いつまでたっても痛みが来ない。

目を開けると、そこには大きな盾を持ち、鎧を見に纏ったマシユの姿があった。

どうやらここはAチームとやらがレイシフトする予定だった特異点Fというところらしい。

そしてマシユは、過去の英雄と融合したデミ・サーヴァントとやら

になったようだ。そんな話を途中で遭遇したオルガマリー所長から聞いた。

さらに、この街に呼ばれたサーヴァントのクー・フリーンの協力により、マシユもサーヴァントの必殺技である宝具を使えるようになった。しかし二人だけでは火力が足りない。

そこで新たにサーヴァントを召喚することになった。

——そんなわけで冒頭に戻るわけだ

「いい藤丸？絶対強いサーヴァントを喚ぶのよ！」

「いや、そんなこと私に言われても」

召喚なんて初めてだし……………

そうしている内にマシユの盾が光り始める。そのうえに輝く光の輪。三つの光の輪が収束し、一際眩しい光があふれる。

やがて光がおさまると、そこには一人の男が立っていた。

「サーヴァント・バーサーカー。真名はワンダ。召喚に応じ参上した。

あんたがマスターか。ま、うまく使ってくれよ」

これが私と彼、ワンダとの出会いだった。

英霊召喚（裏）

気がつけば、タイムスリップしていた。

ちよつと何言ってるかわかんないだろうが、俺も分からない。俺はどうやら過去に転生したらしい。何故そう思うのか。簡単だ。

現代には藁で編まれた家なんて殆どないし、その日の食料を狩りに行く人だってそうそういない。しかし、俺の目の前ではそんなことが当たり前のように行われていた。

別にトラツクにひかれた記憶は無いし、ましてや誰かに召喚されたわけでもない。

ふと気がつくところだった。

とはいえだ。別にもとの生活に未練があるわけでもない。

何かを成したわけでもなければ、誰かの助けになつたわけでもない。

強いて言うなら、ここでの生活は少々不便であることだけだ。

というわけで、俺はここで暮らしていくことにした。

ここでの親と、共に暮らす日々。

母に家事を習い、父に狩りを教わり、近所のおじさんに畑仕事を覚えさせられた。

とても新鮮で、最高の日々だった。

そんな中、俺はある問題に直面する。

娯楽が無い。

これは由々しき事態だ。

ここがいつの時代かは知らないが、娯楽というものが無さすぎる。

彼らはこの生活を昔から続けて来ているので問題ないだろうが、こちらとら現代社会産の養殖一般人。

狩り、家事、畑仕事の毎日では、ストレスが溜まってしまう。

そこで俺は小説を書くことにした。

とはいえこんな大昔（多分）に紙なんてものは無い。

代わりに木版に字を彫ることにした。

当然日本語では無く、この村で使用されている言語だ。

そして、いざ小説を書こうと思っても、アイデアが浮かばない。なので初めは設定を考える必要の無い二次創作に手を出す。

初めての作品は俺が現代ではまっていたゲーム『ワンダと巨像』の二次創作だ。

さあ、腕が鳴るぞ。

その日の夜から不思議な夢を見るようになった。

自らがワンダとなってあの世界を冒険する夢だ。

その夢では、俺は現実のことを覚えていない。しかし夢から覚めた時には、すべて覚えている。

控えめに言って最高だった。

アグロと共に広大な大地を駆ける疾走感。

数々の美しい景色。

大迫力な巨象とのスリリングな戦い。

そして、二年ほどかかったある日。

仕事やら何やらの合間に続けていた執筆を終えた。

凄まじい達成感。だが、こんなもの誰かに見られてはたまったものではない。

自分の名前を記すのはやめておこう。

初めて小説を書き終えた日から何十年もたった。

俺ももう老いた。そろそろくたばるだろう。

結局あの小説以外ではどんな物語を書いても夢に見ることはなかった。

あの夢が何なのかは結局わからない。

俺はこの人生を楽しめた。それだけで満足だ。

ああ、もう眠たい。

こうして俺の人生は幕を閉じた。

そのはずだった。

☆☆☆

目が覚める。

俺は確かに死んだはずだ。

しかしまだ意識はある。

情報が頭に流れこんでくる。

ここは『座』という場所らしい。

俺の小説が掘り起こされ、有名にたったことで俺は英霊というやつになっただけらしい。

しかし、『ワンダと巨像』の作者としてではなく、『ワンダと巨像』の作者の意識を持ったワンダとしてだ。

英霊というやつは聖杯戦争に呼ばれて戦うらしい。

俺は戦いなんざやったことは無い。せいぜい夢の中で巨象を壊して回っただけだ。

せめて呼ばれないことを祈ろう。

そんなことを考えていた矢先にお呼びがかかった。

しかし、これは聖杯戦争ではないようだ。

たった一人、よくわからない場所にほうり込まれて、それでも前に進もうとする一人の女の子。

正直に言えば応じたくない。戦いの役になんて立たないだろう。でも、助けを求められている。

ならば。

そう思い、召喚に応じる。

一瞬目の前が光に覆われ次の瞬間には、一面の火の海が広がっていた。

目の前にいるのが俺のマスターだろう。

ええと、確か召喚時の台詞は……。

「サーヴァント・バーサーカー。真名はワンダ。召喚に応じ参上した。あんたがマスターか。ま、うまく使ってくれよ」

これが俺と彼女、藤丸立花との出会いだった。

自己紹介

目の前にいる青年。名前はワンダと言ったか。
薄汚れた前掛けを身に纏い、顔の上半分を覆い隠すような仮面をつけている。

腰には剣をさげているが、それ以上の武装はしていない。
彼が私と呼んだサーヴァントのようだ。

ひよろつとしていて正直頼りなさそう。

「ちよつとーあなた本当に英霊？しつかり戦えるの？見たところそんなに強くなさそうだし。」

藤丸、ちよつとこいつのステータス見て頂戴！」

所長も同じ事を感じたらしい。

……まあ本人にそのまま言うのはどうかと思うが。

マスターはサーヴァントのステータスを見ることができるとは。所長に言われたとおり彼のステータスを見てみる。

○○○

真名：ワンダ

クラス：バーサーカー

出典：ワンダと巨像

属性：混沌・悪 性別：男性

筋力：B+

耐久：B

敏捷：D-

魔力：E

幸運：D-

宝具：C+

○○○

私は良くわからないので見たままを所長に伝える。

「弱っ！ステータス低すぎるでしょう!？」

魔力なんて無いようなものじゃない！」

「どうやら彼は所長のお気に召さなかったようだ。」

「彼の様子を伺うと、口元が微妙に引き攣っていた。」

「悪いね。俺は基本的に戦うような人間じゃないんだ。」

「生憎とお気に召さなかったようだな」

「ええ！とんだハズレじゃない！」

「ロマニ、マシユ！もう一度召喚します。すぐに用意なさい」

『ま、待って下さい所長！今カルデアは壊滅状態です。』

「これ以上はリソースを割けません」

「なっ！じゃあこんなヘツポコしか呼べないって言うの!?!」

「まあまあ。所長も落ち着いて下さい。」

「とりあえず彼の話を聞きましょう」

「マシユが所長を宥めている。」

「まあ確かにこれから戦っていくなら彼については知っておくべきだ。」

「とりあえずもう一度自己紹介から始めることにした。」

「私は藤丸立花。現役女子高生で一応あなたのマスター？だよ。」

「よろしく」

「私はマシユ・キリエライト。先輩のデミ・サーヴァントです」

『僕はロマニ・アーキマン。カルデア医療部門のトップで今は代理として司令をさせてもらっている。Dr. ロマンとでも呼んでくれ』

「なんで私まで………オルガマリー・アnimスフィア。カルデアの所長よ」

「フリーリン。今回はキャスターとして召喚されてね、今はこいつらと行動している。」

「よろしく頼むぜ、坊主」

「じゃあ改めて、バーサーカー、ワンダだ。」

「さつき見ってもらったようにかなり弱い英霊だ。」

「うまく使ってくれるとありがたい」

「ええと、ワンダさんはもしかしてあの”ワンダと巨像”のワンダさんですか?」

「ええと、ワンダさんはもしかしてあの”ワンダと巨像”のワンダさんですか?」

各自、自己紹介がすんだところでマシユがワンダに問い掛ける。
「ワンダと巨像」

モノという女性を助けるために秘境に乗り込み、16の巨像を倒したワンダの物語だ。

どこかの集落の跡地から掘り出されたらしく、現在も解説が進められていた。

作者不詳だが、胸の踊るストーリーで現代でも二次創作が生まれるほどの人気の作品だ。

私もこの作品は気に入ってる。

「ああ、そうだが。なんでんなもん知ってたんだ？」

俺は誰も知らねえ無銘の英霊のはずなんだが。

俺自身なんで英霊になったのかわかんねえし」

「知らないの？ワンダと巨像の原本は掘り出されたんだよ。

作者の名前らしきものはどこにも記されていないなかったらしいけど」

「…………マジかよ」

どうやらワンダは自分がなぜなったのかわかっていないようだ。

これならワンダと巨像の作者もわかっていないだろう。

気になってただけだなあ。

「ほら、無駄話こそこまでよ。これ以上時間は無駄に出来ないわ。ヘッポコでも盾くらいにはなれるでしょう。さっさと先に進むわよ」

「はい」

所長に促され先に進むことにした。ふと気になったことをクー・フリーリンに尋ねる。

「ねえこの先には何がいの？」

「ああそりゃ見ればわかるさ。よほどの世間知らずじゃなけりやガキでも知ってる。」

つと、どうやら信奉者のお出ました」

「別に信奉者になった覚えは無いがね…。厄介払いをするくらいの仕事はするさ」

クー・フリーリンの視線の先。

そこには黒いモヤに覆われた男の姿があった。

赤き外套の男

「ふむ……：君が相手ということでもいいんだな？」

「ああ、生憎とな。つたく、俺ア初戦闘なんぞね。お手柔らかに頼む」
「それは了承しかねるな。なにせこちらはすでに四人も見逃している
のでね。」

早々に君を倒して奴らを追いかけてねばならん」

今俺ことワンダは黒いモヤに覆われた赤い外套の男と対峙している。
陳腐な台詞だが言わせてくれ。

ああ、どうしてこうなった。

☆☆☆

時はほんのちよつと遡る

「ねえキャスター、あの男の人って……」

「ああ、あいつは敵だぜ。小賢しい弓兵だ」

「それはこちらの台詞だ。君らしくもなくちよこまかと動き回っていたかと思えばまさかそちら側に回るとはね」

「そりやな、こんな燻ったところに居ても何も始らねえ。そろそろ駒を進めねえとだろ」

キャスターと向こうのアーチャーは知り合いなのだろうか。言葉の節々に棘がある。どう見ても友好的とは思えない。

「どうするっ？」

マスターが尋ねる。ここは皆で叩いた方が良さそうだが。

「ここは俺が仕留める。」

……と行きてえところだが、こつちには盾の嬢ちゃん並の戦闘初心者がいるんでな。

「ここは譲ってやる」

…キャスターが何かほざいている。

おつとお、雲行きが怪しくなってきたぞお？

「と、いうわけだ。」

「ここは任せたぜ、坊主！」

「待て待て待て。おかしいだろう。」

いくらなんでもいきなり実践って。俺は人間相手に剣振るつたことすらねえぞ!？」

あんまりだ。

いくらなんでもひど過ぎる。

せめてサポートくらいつけてくれよ。

そう思っつてマスターに目を向ける。

必死に目で訴えればマスターだつーーー

ーーーああダメだありや。

なんでだよ。なんできつきあつたばかりの奴にあんな期待した目ができるんだよ。

やめろ、やつちやえバーサーカーみたいな顔すんな。

「おっと、行かせるとでも思っているのかね？」

俺を置いて進もうとするマスター達の前にアーチャーが立ち塞がる。

おう、やつちまえ旦那！

「へっ、悪いな。今回はお前の相手をしてる暇が無いんでね。」

そらっつ、アンサズ!!」

「……っくー！」

キヤスターがルーン魔術を唱える。

そこから放たれた炎は男に直撃した。

大したダメージにはなっていないようだが男が怯んだ瞬間にマスター達は先に進んだ。

取り残されたのは赤い外套の男と俺。

当然奴は俺を仕留めようとするわけで。

話は冒頭に戻る

☆☆☆

奴は二本の中華刀を構える。

初心者の俺から見ても独特の構えだ。

まるで弓を構えているようだ。

俺もやけになりつつ太陽の剣を構える。

「さあ、いくぞー」

男に向かって一直線に突っ込む。

男の剣と俺の剣が激しく交差した。

当然の如く弾かれる。

だが、そんなことはわかっていた。

後ろに飛びのき、奴の反撃をかわす。

即座に踏み込み奴の首目掛けて突きを放つ。

これは俺の右前にしゃがむことでかわされた。

そのまま右手の中華刀で切り上げてきた。

素早く剣を引きその一撃を受け止める。

そのまま奴の胴を蹴り、その反動で離脱する。

互いに距離を取り、構える。

「ふむ……君は本当にこれが初戦闘なのか？

とてもそうには思えんが」

「確かにこれが初戦闘だよ。

俺自身も想像以上に動いて驚いてるがな。

これが近代の英霊になった恩恵ってやつか」

そう話ながらも油断はしない。

奴との戦闘はまだ続く。

決着

「ワンダさん、大丈夫でしょうか？」

やはり協力して戦った方がよかったのでは……………」

マシユがそんな事を尋ねてきた。

確かに軽率だったかもしれない。

「確かに初戦闘であいつの相手はきついだろうな。」

だが、この先にいる相手は消耗したまま戦って勝てるような相手じゃねえ。

かといってあの赤マントを無視して後々合流されると厄介だ。

だからあいつにはワリイが足止めしてもらわなくちゃならねえ」

「そつかあ。でもきつと大丈夫だよ」

そう、きつと大丈夫だ。

「どうしてそんな事言えるのよ。」

アイツ目茶苦茶弱そうだったじゃない」

どうしてって？

そんな事決まってる。

彼は、ワンダは、

「ワンダは一人の女の子を助けるために多くの壁を乗り越えた立派な英雄だもの！」

……………まあ、ワンダと巨像を読んだ私の所感でしかないけど。

☆☆☆

「だあくそ。キツすぎるだろ!？」

チュートリアルはもつと優しくあるべきじゃねえの!？」

立花達が洞窟の奥に進んでいる頃、

ワンダと赤い外套の男はいまだに戦っていた。

「ふむ…………君も中々にしぶといな。本来ならとっくに君を倒して奴らを追っているところなのだが」

「そいつあどうも。だがこちとらもう限界だ。そろそろ決めさせても

「らうぜー！」

「強気じゃないか。君が私に勝てないのは今の戦いでわかつたはずだが？」

「ふん、確かに俺の剣じゃお前にはとどかねえ。

ので、ちよいと小細工使わせてもらうぜ」

そう言つてワンダは前掛けを取り出す。

それを身に纏うと、たちまちワンダの姿が見えなくなる。

ワンダが身に纏つたのは紛れの前掛け。

自らの姿を消すものだ。

「これは……アサシンの気配遮断の類か。

だが甘いな。この程度で私の心眼をごまかせると思うなよ！」

そういつて赤い外套の男は虚空を切り付ける。

何かを切る音が響く。

しかし……

「手応えが……無い！」

そこにあるのは先ほどの前掛けと一本の矢。

この矢は鏑の矢。本来ならこれを飛ばす事により生じる音によって敵の注意を逸らすものだ。

しかしワンダが英霊となったことでそれが強化された。

今やこの矢は注意を集めるといふ概念そのものである。

そうして大きな隙を作ってしまった赤い外套の男の背後に弓を構えた男が立つ。

「私の負けか。少し君を侮り過ぎたかな」

「さてね。まあとりあえず俺の勝ちだ」

「ふふふ」

「どうした？」

「いや何、私も生前は君の物語を読んだことがあつてね。

あの台詞は、確かにその通りだと思つただけさ」

「つたく、どいつもこいつも。あんな小説のどこがいいんだか。まあいい。なら最後はこの台詞で締めるとしよう」

ワンダが弓をさらに引き絞る。

そして

「最後の一撃はせつない」

引き絞った弓から先に丸い玉の付いた矢が放たれる。

赤い外套の男に着弾した瞬間それは弾けた。

爆風が巻き起こる。

それがある程度おさまると、そこに立っていたのはワンダー一人だった。

「ああ、クツソ痛え、疲れた。

だあ、マスターおっかけねえと」

彼の戦いはまだ終わらない。

黒き騎士王

☆☆☆

ワンダがまだ赤い外套の男と戦っていたころ。

「何よあれ！なんであんなものがこんな極東なんかにあるのよ!？」

私達は洞窟を進み、大きな空洞に出た。

そこには大きな金色の杯が浮かんでいた。

これが聖杯とやらだそうだ。

しかし、所長の様子を見るにどうやらただの聖杯ではなさそうだ。

そんな私達の目の前に黒い鎧を身に纏った女性が立ち塞がった。

「そら、聖杯の番人様のお出ました。奴さんのエモノはは選定の剣、エクスカリバー。」

ここまでいえば分かるだろう」

『エクスカリバーって、まさか彼女はアーサー王か！史実では男だったはずだけど…そうか、男装していたのか。ってそれ所じゃない！

本当にアーサー王ならかなりまずいぞ！強敵なんてもものじゃない！』

「ああ、奴は魔力放出でかつ飛んで来る化け物だ。細いからって油断すんじゃないぞ！」

アーサー王

そのくらいは私でも知っている。

円卓の騎士の一人で、ブリテンの王であった人。

「……………ほう。娘よ、その宝具は……………」

「なにっ、てめえ喋れたのかよ!？」

「何をしても見られている。」

だから案山子を決め込んでいたのだが、その宝具は面白い。

娘よ、構えるが良い。その宝具、試してやろう」

アーサー王が剣を高く掲げる。それと同時に黒い光が剣から溢れていく。どう見ても尋常じゃない。空気は振るえ光は天を衝くほどに膨張する。

「そら、構える嬢ちゃん。でけえのくるぞ！」

「は、はい！」

マシユが盾を構える。キャスターが目覚めさせたマシユの宝具。私達を守ってくれる鉄壁の守り。

「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め！」

エクスカリバー・モルガン
約束された勝利の剣!!」

「真名、偽装登録——行けます！」

仮想宝具、疑似展開／人理の礎!!」

アーサー王とマシユが同時に宝具を展開する。

「っ、はあああ！」

アーサー王の放った黒い光線をマシユは防ぎきった。

マシユはかなり辛そうだが、あとはキャスターが……………

「よくやった嬢ちゃん。

あとは俺がつ——」

キャスターが、決めてくれるはずだった。

「どうした？よもやあの程度で終わったとでも？

さあ、構えるが良い。見事防いで見せよ！」

再び黒い光がアーサー王の剣から溢れ出す。嘘でしょ？アーサー

王はまだ宝具を撃つて来るつもりだ。

「嘘だろ、おい。どこにあんな魔力が！」

「聖杯よ！おそらくあのセイバーは聖杯からバックアップを受けているの！」

だからまだ宝具を撃つ魔力が残っているのよ！」

所長が叫ぶ。なんだそりゃ。じゃああのアーサー王はまだ何発も

あの攻撃を、宝具を撃ってくるわけだ。

「大丈夫です、先輩。私はまだやれます！」

「マシユ……」

マシユはまだやるつもりみたいだが、あの攻撃を何度も受けるのは
厳しいだろう。

かといって攻めるにしても火力が足りない。

「話は済んだか。では行かせてもらおう！」

「宝具展開します！」

「おっしや、そのいきだ！まだ諦めるには早すぎるぜ！」

キャスターの言う通りだ。

まだ勝機はある。だから……

早く来て、ワンダ！

☆☆☆

駆ける、駆ける、駆ける。

疲れた体に鞭打って洞窟を一直線に。

マスターの助けを求める声でした。

理由なんて、それで十分だ。

爆ぜろ！

「つく……!!」

「どうした、こんなものか？その盾を扱うのなら、凌ぎきって見せよ！」

騎士王の猛攻はまだ続く。黒い聖剣は容赦なくマシユの盾を打ち付ける。

マシユはもう持ちそうにない。

「こいつはちとヤベエな。嬢ちゃんもう持ちそうにねえぞ…」

キヤスターも同じ事を思ったらしい。

早く決着をつけないと。

キヤスターだけでは火力は心許ないがもうこれ以上は待てない。

「キヤスター！決めに行くよ！」

「おう！もうそれしかなさそうだしな！嬢ちゃん、下がれ!!」

「っ！はい！」

キヤスターが宝具の詠唱を開始する。

しかしそれを黙って見ている騎士王ではない。

「フン、させると思うか？」

すぐさまキヤスターの詠唱を阻みに来る。

「させません！」

マシユが止めに入るが――

「邪魔だ！」

弱りきったマシユでは騎士王を止められない。

騎士王の刃がキヤスターの首を切り落とそうと迫る。

その瞬間――

「ガンド！」

所長の放った魔術が騎士王に直撃する。

「くっ！これは!?体がっ」

「ど、どうよ！こ、これで動けないでしょう！」

「所長！」

ナイス所長！

そして動けなくなった騎士王にキャスターの宝具が炸裂する。

「よくやったー！さあ行くぜ！」

やきつくせ木々の巨人、焼き尽くす炎の檻！」

突如騎士王の足元から炎が上がり、檻の巨人が現れる。

巨人は騎士王を掴むと自らの胴体にほうり込み足元で燃え盛る炎に倒れ込んだ。

瞬間、炎はさらに燃え上がり雲を貫いた。

「やったか!？」

——あつ、それフラグ

キャスターがあげた声に私は頭の片隅でそんな事を考えていた。

「つく…はあはあ…はあ…つく」

これは…かなり…効いたぞ…アイルランドの光の御子よ…かはつ

だが、私を倒すには…足りなかったな！」

鎧は半壊し、体のあちこちが焼けた状態で騎士王は吠える。

やばいじゃん！

マシユはもう限界。

キャスターも宝具を使ってもう魔力は残っていない。

「よくやった、と言っておこうか。

では逝くがよい」

騎士王が私の元に歩み寄る。

黒い剣を振り上げ私の首を切り落とそうとしている。

マシユやキャスター、所長が叫んでいるのが見える。

マシユ、キャスター、所長、短い間だったけどありがとう。

ワンダもごめん。せつかく時間稼いでくれたのに勝てなかったよ…。

騎士王の剣は私の首目掛けて振り下ろされ、私の短い人生は幕を閉じ——

「爆ぜろー！」

なかった。

どこからともなく飛んできた矢が騎士王に刺さり爆発したのだ。

衝撃で吹き飛ばされた私を誰かが受け止める。

いや、誰かなんて決まってる。

「遅いよ、ワンダー！」

「わりい、結構てこずってな。」

それよか大丈夫か？咄嗟だったんで爆発巻き込んだじまったが」

仮面の上からでも間の抜けた顔をしてるのがわかる私のサーヴァントだ。

「大丈夫。この服魔術礼装？ってやつだから結構丈夫みたいだし。」

「そっか。じゃあ下がってな。奴さんも弱ってるみたいだし俺でも勝てるだろ」

そういつて私を下ろして剣を構える。

「さあ、始めようか！」

誰だお前

「私を倒すだど？手負いとはいえそう易々と負けてやるつもりはないが？」

突如現れた青年にそう問い掛ける。確かに私は手負いだが聖杯のバックアップもある。よほど高名な英雄でなければ負ける気などさらさらないつもりだ。

「そうさな。今の俺じゃアンタには勝てそうにない。そこでだ。マスター、令呪をきれ！小難しい命令はいらん。ただ勝てと、そう叫ぶだけがいい」

そうか。令呪さえあれば限界以上の力が出せる。奴の力によるが、かなりのダメージを受けている私ではおそらく堪えられんだろう。ならば令呪をきられる前に――

「つく!?!」

「マスターを狙うってか？させねえよ」

「キヤスターア！」

キヤスターの火球が私に襲いかかる。

「え、令呪？何それ」

「ダアーツ！てめえ所長から聞いてねえのかよ。その右手にある痣だ。それ掲げて叫べ」

「おい！奴さんそっち行つたぞ」

奴らがいいあっている内にキヤスターの攻撃をかい潜りカルデアのマスターの下に跳ぶ。狙うは奴の首のみ！

「え、えっと、騎士王を倒して、ワンダ！」

「了解！」

瞬間奴のサーヴァント——ワンダといったか——から光があふれる。その光の中から鋭い突きが飛び出してきた。咄嗟に剣で防ぐが後ろに吹き飛ばされる。

「霊器……再臨」

その眩きは誰のものだったか。そこに立っていたのは色素の抜けたような肌にしつひびの入った青年だった。

「うつわ。よりもよってこの姿かよ。」

「ワンダ……なの？」

「おう。令呪の力でパワーアップしたスーパーワンダってな。」

「どうやら令呪をきられてしまったらしい。その結果奴の霊器は更なる力を得たようだ。これはかなり厳しいか。だが、

「だが、所詮無名の英霊。多少力が上がったところで私に勝てるとは思わないことだ」

「そりややって見なけりやわかんねえだろ。それにこの姿になった事でアイツの力を一部操れるようになったらしい。とりあえず、アンタで試させてもらうぜ」

「そういうなり奴の右腕が黒いモヤに覆われていく。

「ち、ちよつとワンダ。何それ？大丈夫なやつ!？」

「大丈夫大丈夫。マスターは下がってな」

「そういう間にも奴の右腕を覆うモヤは大きくなり、やがて人の腕のような形を成した。」

「そら、大賢者様の右腕だ。しつかり歯あ食いしばれよ!」

「奴はその腕を私に向かって振り下ろして来た。」

「そんなもの、簡単に——つく!？」

「右腕が上がらない! キャスターの宝具のダメージがここに来て……!」

『我が魂ソウルは悪魔フォー・ドルミンの為に』 限定発動だ!』

私は迫り来る黒き右腕になすすべなく叩き潰された。

☆☆☆

「うっしこれで終わりだな」

「つかあ、疲れた。マジで疲れた。まさかドルミンに操られていた時の姿まで再現できるとは。かなりの魔力を消費したが、いずれは全身に纏う事もできるのか？」

「つとそんなことよりもだ。」

「おーい、全員無事か?」

「うん、全員生きてるよ。無事とは言いがたいけど。それよりもその姿は？ 仮面も外れてるし。さっきの黒い腕だって……」

「まあその話はまた後で。それよりも——」

キャスターの視線の先。そこには光に包まれ消滅しかけているアーサー王がいた。

「私は負けたのか。結局私一人ではどう足掻いてもこうなる運命だったということか」

「おい待てよ。てめえ何知ってやがる？」

「貴方もいざれ知るだろう。聖杯を巡る戦い——グランドオーダーは始まったばかりだ。」

「おい！ そりやどういう——ちっ。時間切れか。納得できねえがここまでだ。嬢ちゃん、次に呼ぶときはランサーのクラスで呼んでくれよ」

そういつて騎士王とキャスターは消えていった。

「えっと、これで終わり、かな？」

『ああ。騎士王の霊器は消滅。これで終わりだ。所長も喜んでくれてるはずだ。つてあれ？ 所長？』

「グランドオーダー冠位指定……何故彼女がその名を……」

「所長何か気になることでも？」

「い、いえ。なんでもありません。これでミッションは達成です。とりあえず聖杯を回収しましょう」

所長達の話を聞く限りとりあえず解決らしい。これでやっと休め

「まったく、騎士王までもが敗れるとは。埋め合わせの為に集められた48番と思つて見逃したというのに。」

「……………誰だお前？」

どうやらまだ休めそうにない。

聖杯

「一体だ r 「レフ！レフなのね！」

おい

「だからそいつだ r 『レフだって!?レフ教授がそこにいるのかい!?』

おいおい

「誰か説 m 「ああロマニ。君も生きていたのかい。制御室に来るよう言っておいたのだがね。まったくどいつもこいつも統制の取れていないクズばかりだ。」

おいおいおい

「聞いてんの k 『どういうことだいレフ』

.....

「いい加 g 「そうよレフ！何を言ってるの！」

.....

「なあそろ s 「ダメです所長！その男は……！」

.....

「本当にお前 r 「ああマリー。臆病なマリー。何故君は生きているのかい。いや、違うな。確かに爆弾は君の足元に設置したはずだ。」

「え、どういうことよ……」

「まだ気付かないのか？君の肉体はもう死んでいるんだよ、マリー。よかったじゃないか。念願のレイシフト適性は亡霊となってようやく手に入れることができた！」

「そんな……だって私は……」

「ついでだ。面白いものを見せてやろう。」

.....
(ブチッ)

「見るがいい。あれが貴様らアニムスファイアの愚行の結果だ！」

「なっ！私のカルデアスが真っ赤に……」

「あれは君のものではない。——まったく最期まで耳障りな小娘だ」

喧嘩売ってんだな？ そうなんだな？ 上等だこの野郎。

「君には完全に消えてもらう。ただしそれだけでは芸がない。そこでだ」

「な、何！体が引つ張られてる!?!」

「君の宝物とやらに触れてみるといい」

「ちよつと待つてよ！それつてカルデアスのこと!?!ダメ、ダメよ……あれは高密度の情報体よ！そんなことしたら……」

「そうだ。人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。さあ遠慮なく生きたまま無限の死を味わうがいい」

抜き足、差し足、忍び足つと。

「いや、いや！わたしまだ死にたくない。だってまだ褒められてない。誰もわたしを認めてくれてない！誰もわたしを評価してくれなかった。いや、いや、イヤアアア!!死にたくない。だって——生まれて一度も誰にも認めてもらってないのに——」

「所長！」

「フハハハハハ！さあ、もがき苦しむがいい。フハハハ——がふあつ!?!」

そおい！

「『えつ?』」

「がはっ！な、何が……」

「ったくよお。揃いも揃って無視しやがって。おかげさまで簡単に背後取れたぜ。んじやちよいと拝借」

「貴様は……有り合わせの英霊……!」

「その有り合わせに背中ぶつ刺されちやざまあねえな。おいマスター、聖杯使うぞ！答えは聞かねえけどな！」

「えっ、あ、うん」

「ま、待て。貴様何を！」

何をつて決まってるだろ。

「聖杯よ！我が願いを聞き入れよ！『オルガマリィ・アニムスファイアを生き返らせてくれ』」

「き、貴様あー！」

これでよしつと。およう？所長がまだ引つ張られてるぞ？

「ハ、ハハハ、フハハハハハ！下らん事に聖杯を使ってくれたな雑魚サーヴァント！だがあの小娘は助からん。このままカルデアスに触

れ、消滅するのだ！フハハ——あつ？」

「るっせ、とつとと死んでろ。さてと………」

あつ、首斬つちまった。まだ聞くことあつたんだがなあ。

「ねえワンダー！どうするの！もう所長が………」

「わかつてる。ちと下がつてろ」

まあいい。それじゃ、人助けと行きますかね。

「おい！オルガマリー・アニムスファイア！」

☆☆☆

——死にたくない——

——褒められてない——

——認められてない——

——いや、いや、イヤアアアア——

薄れ行く意識の中で先ほど自分が発した言葉が反復される。きつと私はこのまま消えてしまうのだろう。誰にも評価されることなく。誰にも認められることなく。これが私にはお似合いなのかもしれない。このまま消えて——

『おい！オルガマリー・アニムスファイア！』

これは、誰の声だっただろうか。つい最近聞いてような気がする。

『アンタはどうしたいんだ』

それは——

『何言いよどんでやがる！アンタは死にたくねえんだろ!?誰かに認めて欲しいんだろ!』

でも——

『でももくそもあるか！アンタがどうするかはアンタが決める！そうすりゃその手助けぐらいはしてやる!』

それでも私は——

『だあ！まどろっこしいな！アンタが死にたくねえなら俺が死なせねえ！アンタが死にたくねえなら俺が死なせねえ！だから、アンタが何をしてえのかしつかり口に出しやがれ!』

わ、私は——私は死にたくない！まだ誰にも認められてないもの。だから私を助けて……ワンダ！

『上出来だ。なら俺の手を掴め！アンタは俺が助ける！』

何も見えないけど確かに差し出されたその手を、私はしっかりと掴み——

「ぜあらあああ！」

そんな叫び声を最後に私の意識は完全に落ちた。

☆☆☆

『大変だ！もうじきその特異点は崩壊する。皆、カルデアに強制送還するよ！』

かくして、立花、マシユ、ワンダはカルデアへと帰還する。しかしワンダの背中では白髪の女性が少し安心した表情で眠っていた。

幕間の物語 First

目覚め

夢を見ている。

一人の男の夢だ。

男は馬に乗り草原を駆け、光の指し示す方へと突き進む。

対峙するのは大きな石の像。男は石像の背によじ登り青い紋様に剣を突き立てる。もがき苦しむ石像に何度も、何度も、何度も。

やがて石像は動かなくなりその体から黒いモヤのようなものが吹き出した。それは一直線に男に向かい、男の体に突き刺さる。男は苦しみ、倒れ、そして――

☆☆☆

目が覚める。ここはどこだろう。目の前にある白い天井は、

「知らない天井だ」

「ああ先輩！目を覚ましたんですね！」

大きな声に反応して隣を見るとそこにはマシユがいた。その安堵した表情を見るとかなり心配をかけたと罪悪感に駆られる。

「えっと、ここはどこかな？私どれくらい寝てた？」

「ここはカルデアの先輩のお部屋です。先輩はカルデアに帰還して約3時間ほど眠っていましたよ。少々お待ちください。ドクター達を呼んで来ますので」

「ああ、うん」

そういつてマシユ部屋から出て行った。3時間、短いのやら長いのやら。

——時は立花一行がカルデアに帰還した時まで遡る——

「レイシフト完了。全員無事に帰還しました」

「お疲れ様。立花ちゃんは気絶してるね。さすがに荷物がかかったか。誰か、所長と立花ちゃんを部屋まで運んであげて。それと、マシユは立花ちゃんについてあげて。目が覚めたとき一人だと不安だろうからね」

「了解しました」

橙色の髪を後ろで束ねた優男が指示をとばす。声からしてあいつがDr. ロマンだろう。マシユと職員らしき人が所長とマスターを運んでいく。

「あーっと、俺は?」

「ああ、君は少しここで待っていてくれるかい。いろいろと聞きたいことがあるからね」

そういつてロマンは指示出しに戻る。と——

「そう、いろいろとね」

「うおっ!びつくりしたあ」

突然隣から声が聞こえた。慌ててそちらに視線をやるとそこには美女がいた。顔のパーツから体つきまで完璧と言って差し違えない。右手につけているものはガンドレットだろうか。それにしてもこの顔はどこかで見えたことがあるような気がする。それも転生する前、現代社会で…………

「モナリザ…………だっけか」

「おや、ご存知なのかい?」

「一応な。それよかアンタは?」

「ああこれは失敬。私はレオナルド・ダ・ヴィンチ。気軽にダヴィンチちゃんと呼んでくれたまえ」

「知ってるかも知れんがワンダ、ただのワンダだ。ワンダでいい。俺もダヴィンチと呼ばせてもらう。ってか、」

目の前の美女はレオナルド・ダ・ヴィンチと、そう名乗った。はて、俺の記憶が正しければレオナルド・ダ・ヴィンチ

は――

「男じゃなかったか？」

「むっふっふ。よくぞ聞いてくれたね。そう私は男だ。しかし私はモナリザを仕上げた時に思ったんだ。美しいと。だから私自身がモナリザになったのだ！」

誇らしげに胸を張るダヴィンチ。はつきり言っただけで何いってるかわからない。モナリザを美しいと感じたと、これはわかる。だからモナリザになった、これがわからない。何故モナリザにならなくてはならないのか。そもそもその発想がおかしい。

「天才だからね」

表情に出ているのかダヴィンチがそういつてきた。なるほど、天才というのは変態なのか。勉強になる。

「それよりも、だ。私も君に聞きたいことがあるんだ。君はワンダと巨像のワンダで間違いないんだよね？」

「ああ、そうだな。アンタもそれ知ってるんのか？」

「まあ近代の芸術にも触れる機会はあったからね。それじゃあ次の質問だ。先ほどの戦闘で見せたあの黒い腕は？」

「ああ、ありやドルミンの腕だ。どうやらさっきの靈器再臨？つてやつで多少は使えるようになったらしい」

「その姿もそいつの影響なのかい？」

「ああそうだな。こりや俺がドルミンに取り付かれた時の姿だ。あんまり好きじゃねえんだがね」

そうやってダヴィンチの質問に答えていく。その中で俺もここカルデアについていろいろと聞いていた。と、そんな応答も終わりが近づいてきた頃、管制室――ここの部屋の名前らしい――の扉が開かれた。

「ドクター！先輩が目を覚ましました！」

覚悟

さて、マスターが目覚めた日から一晩明けた。さすがにレイシフトだの戦闘だのってのは女子高生には堪えたらしい。もう一度眠ってしつかり休んでもらったそう。かく言う俺も初めての体験ばかりで疲れていた。前世？まあ小説書いてた時の夢もリアルだったが流石にこれほどではなかったのでありがたく休ませてもらった。

「さて、全員揃ったね。さあ、ブリーフィングを始めよう」

俺達は今管制室に集まっている。これからの方針についてマスターにいろいろ話すらしい。俺もしつかり聞いておかなくては。ちなみにダヴィンチちゃんはいない。ロマン曰く何かの準備をしているらしい。

「その前に、立花ちゃん。しつかり眠れたかい？」

「ええと、大丈夫だよ。マッシュが側にいてくれたおかげで安心して眠れたから」

どうやらマスターはもう平気らしい。強かなことだ。あれだけの体験をしていながら眠れるとは。いや、近くに安心できる存在がいたおかげか。

「それじゃあブリーフィングを——」

「ちよつとロマン！なぜあなたが仕切っているの！ここは所長である私が仕切るべきでしょう！」

ロマンの言葉を切って抗議するのはオルガマリー・アニメスファイア。特異点Fにて消えるはずだった命。カルデアスに飲み込まれようとしていた彼女の体を俺が引っ張りあげたことで助かった命だ。（なんかこの言い方恩着せがましいな）

「ああ、ごめんよマリー。君はまだ休んでいるべきだと思ってる」

「余計なお世話よ！それに本当に休むべきなのはあのマスターよ。突然意味のわからないことに巻き込まれたのだから」

「それは……………」

ロマンが言葉に詰まる。当然だ。彼女はまだ高校生なのだから。

「えつと、私は大丈夫ですよ？」

「大丈夫ねえ、まあ良いわ。これよりブリーフィングを始めます。皆さんしつかり聞いておくように」

カルデアの職員が耳を傾ける中ブリーフィングが始まった。

「それではマスター立花。これからあなたに背負ってもらう使命を説明します。一つ目は『特異点の調査及び修正』その時代における人類のターニングポイント、つまりそれがなければ我々はこちらまで至れなかったという人類史における決定的な「事変」のことです。あなた達はその時代に飛び、それが何であるかを調査・解明してこれの修正をしなくてはなりません。そうしなくては2017年は訪れず、2016年のまま人類は破滅するだけです。これが第一の目的。これからの作戦の基本原則となります。ここまでで質問はありますか」

ふむ。2017年は訪れない……か。俺はこの時代に生きてたわけではない。現代で生きていたころもおそらくこの世界ではないだろう。しかし、この言葉を聞くと何ともやるせない気持ちがあふれてくるな。

「ええと、今回の冬木みたいに敵が聖杯を持っていたりするんですか」
マスターの疑問はもつともだ。俺は最後に止めをさしたただけだったが、先日ダヴィンチちゃんに聞いたところ聖杯を持った騎士王は尋常じゃ無く強かったそうだ。そんなものがホイホイ出て来たんじゃない。たまらない。

「それについては次の目的と共に説明します。二つ目の目的は『聖杯の調査』です。これは私達の推測ですが、特異点の発生には聖杯が関わっています。そもそも聖杯とは願いを叶える魔導器の一種のことで、膨大な魔力を有しています。おそらく敵は……レフは何らかの形で聖杯を手に入れ悪用したものと考えられます。でないと時間旅行や歴史改変など不可能ですから。なので、特異点を調査する過程で聖杯に関する情報を得られるはずです。歴史を修正したところで聖杯が残っているのは元の木阿弥もくあみです。なのであなたは聖杯を手に入れるか、あるいは破壊しなくてはなりません。そして先ほどのマスター立花の質問に対してですが、おそらく聖杯は敵が保管していると思われ間違いありません。おそらく今回以上の激戦となると思われます」

「やっぱり……」

ホイホイ出てくるらしい。冗談だろう……

「それに対してはしっかりと対策をしています。まずこのカルデアにて数騎の英霊を召喚します。これである程度の戦力は確保できるでしょう。また、レイシフト先でも召喚を行います。霊脈を探し召喚サークルを作成することで物資の転送のほかにマシユの宝具を触媒にサーヴァントの召喚を行えます。召喚される英霊はその時代や場所に近いものとなるでしょう。こうして戦力を強化していきます」
「えつと、つまりレイシフト先でベースキャンプを目指すことでいいんですよね？」

「ええ。その認識で構いません」

なるほど。ここカルデアで英霊を召喚するだけでなく現地でも召喚を行うことで戦力の強化を行うわけか。

「長くなりましたがこれらがあなたが遂行する任務です、マスター立花。よろしいですか？」

「は、はい」

「それではあなたに一つ問います。あなたはこれから世界のために戦ってもらいます。幾たびの苦難が待ち受けているでしょう。それでも、あなたは戦う覚悟がありますか？」

「それについてはボクからも一つ。この任務は強制じゃない。ボクらが言うのもただだけど世界の命運を一人の女子高生に背負わすなんて正気の沙汰じゃない。もし君が戦わないことを選んでも誰も君を責めはしない。それでも、それでも世界のために戦ってくれるかい？」

所長とロマンがマスターに問いかける。ロマンも言っているが世界の命運を一人の女子高生に背負わすなんて正気の沙汰じゃない。もしここで彼女がどんな選択をしようと俺はマスターに従う。それがサーヴァントつてもんだしな。

「先輩……」

「ええと、私はまだ生まれて十数年しか生きてません。世界なんて言われてもあんましイメージできないし、それを救えって言われても

やっぱり良くわかりません。でも……でもこのままじゃ良くないってのはわかります。お母さんもお父さんも、友達もみんななくなってるのは。だから、私は戦います。自分の居場所を、世界を取り戻すために！」

「立花ちゃん……」

「あなたの覚悟はわかりました。それではこれよりあなたには人類最後のマスターとして戦ってもらいます。レイシフトは3日後。詳しくは当日の朝のブリーフィングにて連絡します。それでは本日のブリーフィングを終了します。皆さん、3日後までしっかりと休息を取るように。解散！」

自分の居場所を取り戻すために……ね。なら、しっかりと支えてやらなきゃな。マスターがあんだだけの覚悟を見せたんだ。俺もしっかりとやらねえと。

「やあ、ブリーフィングは終わったかい？」

そんな小さな決意を胸に抱いた時だった。芸術家ヘンタイが金色の札のようなものを5枚束ねて持つて来たのは。

召喚再び（前）

芸術家^{ヘンタイ}が持ってきた金色の札は呼付というらしい。聖晶石と呼ばれる石と同じように召喚の触媒となるものだそうだ。戦力を増やすのは必須なので今すぐにでもと召喚室へ向かったはいいが……。

「なあ」

「うん？」

「その手に持つてるのは何だ？」

「えっ、聖杯だけど？」

「いやいやいや、そりゃ見たら分かるって。なんで持つてんのか聞いてんの」

そう、この人類最後のマスターはあろう事か聖杯を持つて来やがった。まあ俺がオルガマリーを生き返らせるために使ったからからっぽだがな。そんなものを持つてきて何をするつもりなのか。

「えつとさつきダヴィンチちゃんに聞いたんだけど、召喚っていうのは縁が大事なんでしょ？ならこの聖杯はあの黒いアーサー王と縁が有る訳だからさ。呼べちゃったりするんじゃないかなあって」

「はっ？じゃあ何か、お前はあの黒い騎士王を呼び出すつてのか？」

「うん、まあ来てくれるかはわからないけど。もしも来てくれたらかなりの戦力になるんじゃない？」

うーん、まあ俺が戦ったときにはすでにボロボロだったしよくわかんねえけど、やはり騎士王というならばかなり強いんだろう。しかし敵だった奴がそうそうこつちに従ってくれるとは思わねえし……。「まあまあ、ものは試しだよワンダ君。そもそも召喚に応じてくれるかもわからないし、いざとなれば立花ちゃんには令呪が有るんだ。それにこちらも精一杯フォローするからさ、とにかくやってみようじゃないか」

芸術家^{ヘンタイ}とマスターの言い分にも一理有る。あれほどの戦力は是非とも欲しい。

それに騎士王ならば……。

「分かった。無茶はしないようにな」

「うん」

まあなるようになるだろう。

「せんぱーい、盾の設置完了しました！」

「どうやらマシユの方も準備が終わったらしいね。それじゃあ早速召喚していこー！」

「おー！」

「フオーウ」

てか今まであえて触れなかったけどよ、こいつ……何？

「どしたのワンダ？」

「いや、何でもねえ。そら、召喚だ召喚」

「よしーじゃあ立花ちゃんはサークルの前に立ってね」

「はーい」

何はともあれ召喚である。マスターが呼付を持って召喚サークルの前に立つとサークルが光を発しながら回り始める。

「来るよー！」

ダヴィンチが叫ぶ。その瞬間、サークルがよりいつそう激しく光る。光が収まると、そこには人影が一つ。

「アサシン、酒呑童子。ふふ、うちを召喚してくれておおきにありがとう。好きにやるけど——かまへんね？」

それは鬼だった。

腰に赤ん坊並の瓢箪を括り、両手には杯。しまいに額からはえた二本の角。まさしく日本の鬼と言える姿だ。

「おんやあ、どないしはった？皆して固まってしもうて」

「いや、すまないね。なにぶん君のような鬼を見るのは初めてでね。つい固まってしまっていた」

鬼——酒呑童子にそうかえしたのは言うまでもなくダヴィンチ。我がマスターはすっかり固まってしまっている。

「あらまあ、鬼を見るのはうちが初めて？したらまだ固まっとするその女子おなごがマスターなん？」

「ええつと、はい。私があなたのマスターです」

そこでようやく再起動したらしいマスターがかえす。

「嫌やわあ、そんな固くならんといてや。これから長うなるんやし、仲良くしよや」

「は——うん、分かった。これからよろしくね酒呑童子」

「酒呑でええで。よろしゅうなあ。ほんで、そのあんたらは？」

そう言つて酒呑の目がこちらに向く。あんたら、とは俺達だろう。ダヴィンチから口を開く。

「ああ自己紹介が遅れてすまなかつたね。私はレオナルド・ダ・ヴィンチ。ここの技術局でよろしくやらせてもらつてるよ」

「私はマシユ＝キリエライトです。先輩——マスターのサーヴァントですー！」

「ワンダだ。同じくマスターのサーヴァントをやらせてもらつている」

「フオウフォーウ」

「おおきに。さつきも言うたけど酒呑童子や。よろしゅうな」

つと一通り自己紹介も終わった所どうするかだ。

「んで、あんたはどうする酒呑？俺達はまだ召喚を続けるるんだが。残るならそれでもいいし、もう興味ないつてんなら職員に部屋まで案内させるが」

「せやなあ。召喚言うんはそう見れるもんやないし興味はあるんやけどなあ。今回はやめとくわ」

「そうかい。じゃあムニエル君だっけか？部屋まで案内頼んだよ」

そう言つて近くにいた職員＝ムニエルに声をかける。マスターが眠っている間知り合つたここの職員だ彼は心底嫌そうな顔をしつつも案内を引き受けてくれた。

「ああそうだ。酒呑君、いまさらだけど一つ聞いておこう。君は我々に協力してくれるつてことでもいいんだよね？」

召喚室から出ようとする酒呑にダヴィンチが声をかける。そうだ、確かにそれを聞いていなかった。

酒呑は足を止め、口を開いた。

「まあそうなるんやろなあ。けど、勘違いせえへんようにな。うちは鬼や。人に命令されるんやのうて、うちのやりたいようにやる。今回

の召喚に応じたんも気まぐれや。そこんところ履き違えたら——」
そう言つて振り返り——

「——蕩かして喰らうてまうかもなあ」
思わず、震えてしまった。

少なくとも冗談を言う目ではない。もしも俺達が彼女の機嫌を損ねれば言葉通り俺達を喰らうのだろう。

「ふふふ、そうならんよう、仲良うしよや」

それだけ言つて彼女は部屋を出て行った。慌ててムニエル君も出ていく。かわいそうに、足が生まれたての小鹿見たいに震えている。戻つて来たら労つてやろう。

「大丈夫かマスター、マシユ？」

「う、うん。何とか」

「わ、私も大丈夫です」

そんなわけないだろうに。後でしつかりと休ませなければ。

「危ういね、彼女」

「ああ。何かあつたときは俺達がなんとかしねえと」

「そうだね。にしても最初からハード過ぎない？もうすでにいっぱいいっぱい何だけど」

まったくもって同意である。これ以上濃いのが来たら正直堪えられん。

「さて、立花ちゃん、お疲れの所悪いけどもう少し頑張つてくれ」

「うん、大丈夫！次行こう」

さてはて、マスターとマシユ、ついでに職員の為にもソフトな英霊に来てもらいたいものだが。

「行くよー！」

マスターが召喚サークルの前に立つと同時にまた光が回り始める。そして一段まばゆく光つたサークルの中心に立っていたのは——

「狼……か？」

「狼……だよね？」

「狼……だね」

「狼……ですね」

ジャーを連れて部屋を出て行った。すげえ胆力だなあ。

「またすごい方がいらつしやいましたね」

「ああそうだな。もうこれつきりにしてほしいものだが」

あれ？さつきもそんなこと行った気が……。

マシユとのそんなやり取りもフラグにしか感じないのは気のせいだろうか。

「皆〜！次行くよ〜」

我がマスターがまた召喚サークルの前に立つ。いやいやもう少し休憩しろよ。つてかさせろ！

そんなこと知らんとばかりに召喚サークルは回り出す。そして大きな光の中から出て来たのは――

「私はアルターエゴ。メイガス・エイジス・エリザベート・チャンネル。

長いでしょう、メカエリチャンで結構です。くれぐれも私を悪用しないように」

「ロボ……か？」

「ロボ……だよね？」

「ロボ……だね」

「ロボ……ですね」

「ロボフォーウ」

ロボだった。

あれっ、超デジャブ。何故だ！何故普通のサーヴァントが来ない！「どうしました？」

「ええつと、どこから突っ込めばいいのかわからないんだけど。貴方は誰？」

「貴方が私のマスターですね。何者かという質問ですが、私は史実に置けるエリザベート・バートリーが正しき心を持っていた場合の存在、いわゆるifの存在です。」

「なるほど、それでアルターエゴ、と」

「ええ、その通りです」

「じゃあその鉄の体は？」

「その前にマスター、私は貴方達の名前すら聞いてません。まずは自

「已紹介を要求します」

ああ、また忘れてた。

「ええ、私は藤丸立花。知つての通りマスターだよ」

「マシユキリエライト。マスターのサーヴァントです！」

「レオナルド・ダ・ヴィンチだよ。ここで技術局の名誉監督をさせてもらってる」

「ワンダだ。マシユと同じくマスターのサーヴァントやらせてもらってる」

「立花、マシユ、ダヴィンチ、ワンダ。記憶しました。そして何故私の体が鉄なのかという質問ですが、話せば長くなります。見るに貴方達は未だ召喚の途中。ならばそれはまた後ほど話すとしましょう」

そう言つて部屋を出ていこうとするメカエリチャンにダヴィンチが声をかける。

「メカエリチャン、君は我々に協力してくれると言うことでいいんだね？」

「当然です。私は正義の味方です。人理消却という悪の所業。それに立ち向かう貴方達。どちらが正義かなど考えるまでもありません。」

そう言つて今度こそメカエリチャンは部屋を出て行った。

「……………あー、君。彼女を案内してやってくれ」

そう声をかけられた職員は慌ててメカエリチャンを追いかけけて行った。

……………あいつ案内も無しにどこに行くつもりだったんだ？

「なあマスターさんや。なんで普通の英霊呼べないわけ？」

「いや私に言われても……………」

ともあれ残りの呼付は二枚。折り返しも過ぎた頃だ。

「よし。じゃあ次の召喚行くよー！」

そして回り出すサークル。まばゆい光の中から出て来た英霊は――

「サーヴァント、ライダー。アルトリア・ペンドラゴンだ。この私が来た以上、理想の生活を覚悟してもらおう」

何だこれ？

何だこれ
!!!!!!?????